

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	兒島先生を送る : 文苑
Author(s)	渭南
Citation	龍南會雜誌, 129: 58-59
Issue date	1909-02-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6208
Right	

兒島先生を送る

五十八

兒島獻吉郎先生、我が校に教鞭を取られ、葛裘を重ねらるる事、こゝに十有三、この間、最高學府、法文科に足を向くる者にして、一度び先生の教授を受けざる者無く、長谷川、遠山の二先生と共に、我が一部を代表し、我が一部の首腦たり。則ち先生の我が一部生に對する關係は、恰も杉山先生の二部生に對する關係の如く、其の間尋常一様の師弟ある關係以外に、或る深き、切ある親しみを、認め得べき者ありし也。

然るに今や、無情なる一片の辞令書は、先生を拉し去りて、東都高師教壇上の人たらしめ、再び吾人をして、其の該博精細ある、支那文學の論評に耳を傾くるの機をからしむ。

この報に接したる吾人は、一度びは悲しみ、一度びは、悦べり、何が政に悲しみしか、曰く日々、指導に與りし良先生を失ふを思へば也、何が故に悦びしか曰く、先生の前途に活動の機會到來せりと豫想せるを以て也、先生が其の孜孜々々、多年研鑽の結果たる、支那古代大文學史は既に剗剗に附せられ將に天下萬衆の耳目を聳動せしめんとす、

龍南、地僻、都門を去る三百里、名著珍本、意の欲するまゝ涉獵に資する事難く、深遠の學、明敏の識、以て共に論議を闘はすべきの士少く、先生の大著は眞に苦心經營の結果にありし者あるべく、今や先生其の偉大ある成果を手にて、都に去る、其の意氣や壯あるべく、其の抱負や大なるべし、かく思へば吾人喜悅の情を以て先生を送らざるべからず

然かも猶、離別に對する暗愁の、そゞろに湧き出でゝ止むる能はざる者あり、先生の教壇に在るや、口極めて少き、然かも感興一度び生じ來るあらば、縱論橫議、委曲細説、滿堂の聴衆聲を吞んで耳を傾く、其の嚴肅莊重ある聲に依りて、明確なる説明の傳へらるゝや、質疑立どころに氷解して釋然たる者あり

これを彼の三寸の舌頭、三角を丸に言ひくるめ、辞徒らに冗長にして、其の眞意を捕捉するに難く自ら霧中に彷徨して、其の結果や、聴衆をして、濃霧の中に其の方向をすら、全く失せしめ、一の質疑出でれば一度び動搖し、二の質疑放たれて、將に其の足場を失はんとし、質疑出づるに連れて大刀筋、益々亂れ、聴衆の腦裏に、曖昧膜糊たる印象を残すに過ぎざる、天下其の多きに堪わざるいはゆる、先生なる者と、日を同じくして語る可らず、其の差や宵壤の如く果た月鼈の如し

吾人は、徒らに、溢美の言を羅列して、他の歡心を買はんとするの陋を學ぶ者にあらず、心中感ずる誠を披瀝せしのみ、總ての人は吾人と感を同じくす、事實は曲ぐ可らざる異なれば也

吾人は、先生の下に在りて、其の教授を受くる、こゝに二歳半、残れる半歳に於て、先生の影を教壇上に見るを得ざるを思ひ、愛惜の情の如何に堪わ難きや。

今や唯先生の東都學界に虹霓の氣を吐く其の目覺しき活動を期待し併せて先生の健康を祈る。

(渭南)